

江戸のリサイクル

エッセイ 大江戸エコロ帖
◆第三回◆

文／石川英輔



図版／東海道の風景、松の木は根方に古わらじが捨てられている。これを地元の農家の人が運んでいじり堆肥にした。江戸名所園会より

リサイクルという言葉は、たとえば空になったペットボトルを化繊の原料にする場合のように「不用品の再利用」の意味で使うことが多い。今では、リサイクルのためにも石油が必要なので、厳密には本当のリサイクルができなくなっているが、ごみの捨て場がなくなりかけているため、こんなリサイクルでもするほかないのだ。しかし、かつての日本では、普通に暮らしているだけで本当のリサイクルが自然に成り立っていた。

江戸時代の日本でもっとも大規模なリサイクルは稲作、つまり米の栽培だった。稲作がなぜリサイクル？と不思議に思われるかもしれないが、江戸時代後期には1年間に約500万トンずつ収穫していた米とわらはは、1年単位で完全に循環する資源だった。

米を食べた結果できる排泄物は、貴重な肥料としてほとんど全量を田畑に戻した。わらの約50%は堆肥にして、やはり田畑に戻した。30%は焚きつけなどの燃料として燃やしてから、できたわらは灰は主にカリ肥料として利用した。残りの20%は、わらを材料にしてわらじ、むしろ、わら縄、米俵などのわら製品を

作ったが、使い終わってからも堆肥、燃料などに利用したので、結局は全量が土に戻った。こうして、毎年合計一千万トンもとれた米とわらという江戸時代最大の生産物は、1年後にはすべて土に戻ったが、そのために必要なのは太陽エネルギーだけだった。人間の行為は農業も含めて、多かれ少なかれ自然環境の破壊がともなうが、太陽エネルギーしか使わない稲作は、環境に対して最低限の影響しか与えなかった。

今回の挿絵は東海道の風景だが、よく見ると、中央の松の根方に古わらじが捨てられている。右手の茶店で新しいわらじを買った旅人が、履き古しをここに捨てていったのだ。この古わらじは、地元の農家の人が肥料にするために回収していった。

遠景には水田が見えるが、この茶店で売っているわらじは、あのあたりの農家の人が自分の田でできたわらを使って作ったのだろう。そして、ここに捨ててあるわらじの多くも、東海沿いの水田で成長した稲わらでできているのには違いない。一足のわらじも、街道と水田の間を循環していたのである。これが本当のリサイクルなのだ。

いしかわえいすけ
作家著書に「江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した『大江戸リサイクル事情』大江戸えねるぎ事務局」などがある。

工作で風力発電を体験



ループウイング (電話03-3237-0680) <http://www.loopwing.co.jp>

発電用の風車を開発している「ループウイング」が、プラモデルなどで知られる模型メーカー「タミヤ」とコラボレート。本格的な風力発電が体験できる工作キットを発売しました。その仕組みは、いたってシンプル。まずは、風車の柄の部分を持ってしぼし早歩き。そうして集めた風力が、付属のミニカーに充電されるのです。手作業で集めたエネルギーによって走るミニカーの姿は、ちょっとした感動的です。

ペットボトルがじょうろに変身



ヴァイスヴァーサ渋谷 (電話03-5464-1110) <http://www.viceversa-e.com>

使用済みのペットボトル。みなさんどうしていますか？ リサイクルに出している人も多いと思いますが、そのまま再利用して、おしゃれな「じょうろ」にしてしまおう！というのが、この「ヴァイスヴァーサウォーターリングポアラー」。ペットボトルのふたを外して、ポアラーを取り付ければ完成です。色はグリーンのほか、オレンジ、ブルーなどもあるので、お部屋のアクセントにもなりそう。

エコモノたちで、
あなたの暮らしを
彩りあるものにしてみませんか。

エコモノ

蛍光管を再生した手作りガラス



松徳硝子 (電話03-3625-3511) <http://www.stglass.co.jp>

日本で年間、約4億本近くも廃棄されている蛍光管。ガラスメーカーの「松徳硝子」では、この蛍光管を再生した「e-glass」を販売しています。日本で初めてエコマーク認定を受けた、安全で環境にやさしいガラスです。しかも、ひとつひとつが職人による手作り。手に取ると、その温もりが感じられます。グラス以外に、サラダボール、フラワーベースなど、バリエーションも豊富に揃っています。